東京会議専門家シンポ　ポスト冷戦時-1990.05.14
(代の国際安全保障(読売新聞



# 東京会議専門家シンポ

## ポスト冷戦時代の国際安全保障

読売新聞社・東京会議（平岩外四会長・篠原三代平議長）では、「社会主義体制の行方と世界」を今年の年間テーマとし、社会主義体制に焦点を当て、一連の討論を進めております。すでに春には開幕座談会「世界新秩序への胎動――ソ連・東欧変革の波紋」（4月16日付本紙掲載）を開催しており、今回はこれに続く専門家シンポジウム・シリーズ第一回「ポスト冷戦時代の国際安全保障」です。「ポスト冷戦時代」という言葉は、一つの流行語となっています。これをあえて本座談会のテーマに含めたのは、今日大きく転換しつつある国際情勢を分析する場合、これまで冷戦の中で当然と考えられていた常識を整理し、今日の状況との対比の中で議論を進めることが有益であろうと考えたからです。特に本座談会では、一九九〇年代の中期展望について論じたいと思いますが、その場合、一番大きな変化のきっかけをつくっているソ連および東ヨーロッパにおける新しい状況をどう解釈し、評価するかということから、自由圏を含めた国際関係の変化、さらに地域の平和と安全、とくにアジア・太平洋地域にも焦点を当てて議論していただければ、と思います。（座長・武者小路公秀明治学院大学教授のあいさつから）

討論する（左から着席順に）中嶋、佐瀬、武者小路、猪木、進藤の各氏

# 新たな役割になう日独

## ポスト冷戦の評価

**武者小路**　ポスト冷戦時代の国際安全保障という問題を取り上げるに当たって、まずポスト冷戦時代をどう見るか、ということから議論に入りたい。

**猪木**　私は、冷戦という言葉は、米ソ間、あるいは東西間の冷戦だと思うんですが、これは明らかに昨年の春にはもう終わっている。アメリカが完勝して、ソ連が惨敗した。冷戦も戦争ですから、勝者があり、敗者があるのは当然です。

米ソ間の冷戦ですから、ヨーロッパでは終わったが、アジアではまだ冷戦をやっているということはありえない。アジアにはまだ緊張要因があるが、これは冷戦が終わったか終わらないかという問題とは関係ない。朝鮮半島の南北対立はこれと無関係ではないが、冷戦と必ずしも重なる問題ではない。別な要素もあり、朝鮮半島における緊張状態は当分の間続くものと思います。

**中嶋**　冷戦の終焉（しゅうえん）ということを米ソ関係を軸に考えると、冷戦は終わり、まさにポスト冷戦の時代に入りつつあります。アジアにおいても、米ソ間はむしろ冷戦的構造を自ら改変せざるをえない状況になりつつある。それでは、いわゆるヤルタ体制まで米ソが枠組みを変えるところにいっているかというと、そうではない。特に東西ドイツの問題、アジア・太平洋地域における日本の問題が非常に大きくなってきています。たとえば北方領土問題も含めて、できるだけ従来の枠組みは崩したくないという新しい了解が、もっと変わろうとする国際社会の構造を抑えている面があると思います。

また、これからの国際社会は、単なる国際政治面だけでなく、国内の民主化の度合いが問題で、特にアジアの場合、権威主義体制に対する反乱が大きくなっていく時代ではないか、という気がします。

## 国境超える経済

### 民生安定が優先課題に

**佐瀬**　昨年春、ブッシュ米政権が登場して、ほどなく「封じ込めを超えて」という演説をやりました。この演説がアメリカの主観において冷戦にピリオドを打った。現実に、昨年後半、東ドイツの体制崩壊から始まった東ヨーロッパの一連の動きは、冷戦の主要な戦場であったヨーロッパで、西側の勝利を明白にしました。ヨーロッパではほとんどの国の主観においてはポスト冷戦期に入っている。

**進藤**　東西間に関する限り冷戦は終わっていると思います。お互いのイデオロギーの違いは非常に少なくなった。一九六〇年代以降、ソ連社会を含めて東欧社会が内側から変わってきている。いわば近代化が進み、西側社会と同じような社会に変わってきている。これが政治経済体制の違いをなくしていく内側からの要因になったととらえたい。

ただ、アジアの場合、非常に遅れた社会、日本のような進んだ社会、NIES（新興工業国・地域群）の国と、市場経済、資本主義、自由主義、民主主義で団結した国との間の冷戦でした。戦争が終わった時、あれほど高かったソ連、社会主義の威信が、戦後四十五年たってとことんまで低下した。

マルクス、エンゲルスというのは大変な学者で、彼らの「史的唯物論」は、今でも人類の社会科学の歴史における重大な業績の一つです。ところが、奇妙なことにマルクス・レーニン主義はそれと全く相反して、社会主義を建設すると言い出した。社会主義は建設するものではありません。マルクス、エンゲルスが言ったのは、生産力は資本主義のもとでフルに発展する、その結果、資本主義的私有財産的生産関係が邪魔になるからその邪魔を取っ払う、ということなのです。

**猪木**　根本的に冷戦というのは社会主義を自称した国と、市場経済、資本主義、自由主義、民主主義で団結した国との間の冷戦でした。戦争が終わった時、あれほど高かったソ連、社会主義の威信が、戦後四十五年たってとことんまで低下した。

マルクス、エンゲルスというのは大変な学者で、彼らの「史的唯物論」は、今でも人類の社会科学の歴史における重大な業績の一つです。ところが、奇妙なことにマルクス・レーニン主義はそれと全く相反して、社会主義を建設すると言い出した。社会主義は建設するものではありません。マルクス、エンゲルスが言ったのは、生産力は資本主義のもとでフルに発展する、その結果、資本主義的私有財産的生産関係が邪魔になるからその邪魔を取っ払う、ということなのです。

佐瀬　昌盛

一九三四年大連（現中国）生まれ。東京大教養学部卒。成蹊大助教授を経て現職。著書に「西ドイツの東方政策」（日本国際問題研究所）、「チェコ悔恨史――そして戦車がやってきた」（サイマル出版会）、「摩擦と革命――東欧、脱ソ連化の軌跡」（文芸春秋）など。

しかし、では冷戦期に比べておめでたいといえるかと言えば、非常に不安定で透明性の欠ける、混濁した時代が十年間ぐらいは続くような気がします。なぜかというと、東では、今までソ連の軍事力のたががはまっていたので、内輪もめはなかった。しかし、そのたがが外れたため、これからは非常に複雑な民族間の対立、憎悪、葛藤（かっとう）が持ち上がってくるからです。

**佐瀬**　昨年九月九日、ゴルバチョフが有名なテレビ演説をやりましたが、その全文を読んで、彼は共産主義に対する背教者、棄教者になりつつあると思いました。演説の中で「社会主義所有形態の多様化」と衣に包んだ言葉を使っているが、実は私企業を意味している。私企業といえないから、社会主義的所有の多様化といったのです。これはマルクス、エンゲルス以来社会主義を建設する、などと言うのはマルクス、エンゲルスの社会主義ではない。そのような社会主義は死んだのです。

四つのポイントがあります。第一に社会主義国では経済が絶望的です。人間の本性に反し、市場経済を否定したものだから、生産財の合理的な配分ができない。そのため縮小再生産に陥って、だめになる。員数はそろえても、質は使い物にならんのです。第二に、それをなんとかつじつまを合わせようとすると、今度は官僚制が腐敗する。国家自体が腐敗の体系になる。ソ連はかりか全社会主義諸国がみなそうです。三番目が人種間、民族間の対立はなくなるはずだったのに、非常に激化した。しかし、四番目が一番大事で、文化の面での絶望的な不毛性です。その文化の不毛性が技術面での立ち遅れに直結していて、それで負けた。だから、今後の安全保障を考えていく上で社会主義の問題はもうケリがついたと言っていいでしょう。

**佐瀬**　昨年九月九日、ゴルバチョフが有名なテレビ演説をやりましたが、その全文を読んで、彼は共産主義に対する背教者、棄教者になりつつあると思いました。演説の中で「社会主義所有形態の多様化」と衣に包んだ言葉を使っているが、実は私企業を意味している。私企業といえないから、社会主義的所有の多様化といったのです。これはマルクス、エンゲルス以来社会主義を建設する、などと言うのはマルクス、エンゲルスの社会主義ではない。そのような社会主義は死んだのです。

四つのポイントがあります。第一に社会主義国では経済が絶望的です。人間の本性に反し、市場経済を否定したものだから、生産財の合理的な配分ができない。そのため縮小再生産に陥って、だめになる。員数はそろえても、質は使い物にならんのです。第二に、それをなんとかつじつまを合わせようとすると、今度は官僚制が腐敗する。国家自体が腐敗の体系になる。ソ連はかりか全社会主義諸国がみなそうです。三番目が人種間、民族間の対立はなくなるはずだったのに、非常に激化した。しかし、四番目が一番大事で、文化の面での絶望的な不毛性です。その文化の不毛性が技術面での立ち遅れに直結していて、それで負けた。だから、今後の安全保障を考えていく上で社会主義の問題はもうケリがついたと言っていいでしょう。

## 軍事力の役割

### 〝土着の力〟を重視

### 局地紛争処理の機能を

**武者小路**　世界の中心で冷戦のケリはついたけれど、他のところをどうするか。残務整理ということについて、米ソが、その力の限界を認めて協力することになった場合、核戦略、それから地域的な紛争はどうなるのでしょうか。

**猪木**　残務整理と、佐瀬さんがおっしゃった時にいまだに敵を減らしていくことによって安全を確保する。安全哲学を大転換したというわけです。

ところが、問題はアジアに顔を向けていない。

**猪木**　その通りでしょう。ソ連として恐ろしいのは、モスクワに近いヨーロッパですよ。だから、今でもソ連の安全保障に関するの共産主義の古典的な教義の一番大事なところをひっくり返そうということです。これは敗北の自認だと思います。

アメリカは、ヨーロッパの主要舞台で西側の勝利はもう不可逆とみているが、中米、キューバ、カリブ海で共産主義の残りカスらしきものがある。アメリカは完全な勝利を目指し、これを全部つぶそうという時代に入ってくるかもしれません。冷戦の残務整理といっていい。

ただ、共産主義と社会主義という言葉は区別しないといけない。社会主義という言葉は、その内容が何であれ、まだやはり残ります。

**中嶋**　私はゴルバチョフの演説を読んで、みずから社会主義ではだめだということを初めて悟った指導者がソ連に出てきたと感じて高く評価しました。

ただ、その問題と、いわば米ソの軍事力を中心とした冷戦体制と全部同じレベルで考えていいのかどうか。つまり、ソ連は自らの体制の危機をかかえているがゆえに、軍事力を行使して、あるいは軍拡競争にすべてを傾注してやろうとしてきた。そのシステム自体が実は壊れていったのです。これはアフガン侵攻問題が非常に大きかった。同じことはアメリカ側にも言えます。アメリカにとっては、ベトナム戦争だった。つまり、アメリカもソ連も、ちょうど十年ぐらいの時差で同じ教訓を学び、もはや軍事力によって物事を解決しない。

**佐瀬**　残務整理をアメリカは考えるかもしれないといったが、それは残務整理に成功するかどうかとはまた別です。残務整理の中で、キューバのカストロ政権は倒すかも知れない。しかし、もともとカリブ、中米地域が抱えている問題の解決までもが一緒にできるとは思いません。

それから、ブレジネフ時代までのソ連は不必要に敵をたくさんつくりすぎた。ところがゴルバチョフになって大きく戦略転換した。かつての軍事的な手段で一生懸命敵をふやしたようなばかなことをやめ、政治的に敵を減らしていくことによって安全を確保する。安全哲学を大転換したというわけです。

ところが、問題はアジアに顔を向けていない。

**猪木**　その通りでしょう。ソ連として恐ろしいのは、モスクワに近いヨーロッパですよ。だから、今でもソ連の安全保障に関するの共産主義の古典的な教義の一番大事なところをひっくり返そうということです。これは敗北の自認だと思います。

アメリカは、ヨーロッパの主要舞台で西側の勝利はもう不可逆とみているが、中米、キューバ、カリブ海で共産主義の残りカスらしきものがある。アメリカは完全な勝利を目指し、これを全部つぶそうという時代に入ってくるかもしれません。冷戦の残務整理といっていい。

ただ、共産主義と社会主義という言葉は区別しないといけない。社会主義という言葉は、その内容が何であれ、まだやはり残ります。

**中嶋**　私はゴルバチョフの演説を読んで、みずから社会主義ではだめだということを初めて悟った指導者がソ連に出てきたと感じて高く評価しました。

ただ、その問題と、いわば米ソの軍事力を中心とした冷戦体制と全部同じレベルで考えていいのかどうか。つまり、ソ連は自らの体制の危機をかかえているがゆえに、軍事力を行使して、あるいは軍拡競争にすべてを傾注してやろうとしてきた。そのシステム自体が実は壊れていったのです。これはアフガン侵攻問題が非常に大きかった。同じことはアメリカ側にも言えます。アメリカにとっては、ベトナム戦争だった。つまり、アメリカもソ連も、ちょうど十年ぐらいの時差で同じ教訓を学び、もはや軍事力によって物事を解決しない。何の心配もない。

**中嶋**　これからは軍事力の時代ではなくなる。少なくとも今までは軍事力を強化して覇権国家たちんとした枠組みがありました。が、もはや通用しなくなったと考えます。これからは経済とか社会の充実そのものが、安全保障上でも大きな意味を持つと思います。

**武者小路**　ワシントンの学会で、土着の力を「内発安全保障」と名付けて問題提起しましたら、アメリカの国防大学の先生が「そんなことを言ってもアメリカの出番がないじゃないか。それじゃ困る」と言われました。

**佐瀬**　その前に、軍事力がどんな役割を果たしてきたのか、今後果たすのかということですが、戦後四十五年間、余り大きな役割を果たさなかったともいえます。ただ、米ソ超大国は軍事力を影響力行使の手段として使ってきたし、使おうとしてきた。今後、重要になるのは対外的影響力行使の手段というよりは、自衛ないしは防衛の手段としての軍事力ですね。これは残る。むしろ総体的には、そちらの方がクローズアップされるのではないですか。

**進藤**　何か安全保障に対する新しい考えが出始めているという感じがします。今までは軍事力を軸にした安全保障一本やりでしたが、東西関係、基本的な対立関係が終焉し、問題は第三世界のローインテンシティー・コンフリクトに限定され始めてきている。特にボーダーレス・エコノミーのもとで、お互いの欲しているのは民生の安定なのだという視点から安全保障観をとらえ直す時代ではないかと思います。

武者小路　公秀

一九三九年ブリュッセル生まれ。学習院大学政経学部卒。仏、米での研究生活ののち帰国、学習院大、上智大各教授、国連大学副学長を経て現職。著書に「現代フランスの政治意識」（弘文堂）、「国際政治と日本」（東京大学出版会）など。

# 年間テーマ　社会主義体制の行方と世界

## 新しい秩序

### 出席者

（敬称略・順不同）

猪木正道　平和安全保障研究所会長
佐瀬昌盛　防衛大学校教授
中嶋嶺雄　東京外国語大学教授
進藤榮一　筑波大学助教授
武者小路公秀　明治学院大学教授
（読売新聞社調査研究本部客員研究員＝座長）

# 米ソ「力の枠組み」後退

## 米軍の存在なお必要

### 欧州と太平洋「同盟」の内容に変化

猪木　正道

一九一四年京都生まれ。東京大経済学部卒。法学博士。専門は政治学。三菱経済研究所から学界へ。成蹊大、京都大各教授、防衛大学校長を経て現職。著書に「ドイツ共産党史」（弘文堂）、「独裁の政治思想」（創文社）、「評伝吉田茂」（読売新聞社）など。

**武者小路**　ポスト冷戦期の国際安全保障のあり方について、新しい視点を出さなければならないということですが、二点を中心に議論を進めたいと思います。

一つは、東西関係の問題がなくなるとヨーロッパではドイツ、アジア・太平洋では日本という、非常に強い国の潜在的脅威に対して、地域集団安全保障という課題があるのではないか。

もう二つは、太平洋を中心とした海洋核の問題。これは現在動き出しにくい状態にあるようだが、軍縮への可能性を含めて、話を進めたいと思います。

**佐瀬**　ヨーロッパでは東西関係が改善され、来年の夏までにドイツの統一が実現することが疑いなくなってきたが、大きくなるドイツに対してどうバランスをとっていくのか深刻な問題になっていると思う。ポーランドはドイツがオーデル・ナイセ国境の東側をまた要求し出すのではないかと懸念している。歴史的に全く根拠がないというわけではないが、現実の可能性として、むしろドイツは相当強く軍縮志向を明らかにするのではないか。つまり、軍事大国化していくかどうかは、周辺の世界がドイツをどう処遇するかに非常に緊密にかかっていると思う。

ただこれを誤ると、ドイツは独自の道を歩む。したがって、やはりNATO（北大西洋条約機構）の中にしっかりと結びつけておくのが一番いい。西ドイツ自身もそうすれば国際的な批判を浴びないと悟っています。その場合、絶対に必要なのは、アメリカが在欧米軍を全部引き揚げず、一種の保証人としてヨーロッパに存在し続けることです。

アジアの場合は、地域全体を覆うような安全保障網というものがないわけだが、日本がひとり歩きしないという保証を周りの国が強く求めるのではないか。ですから、統一ドイツが志向しているような、アメリカを保証人とする形で、独自の動きをしないという行き方が参考になるのではないか。そのシンボルとして、日米安保条約は、日本として持ち続けるべきだ。

**猪木**　基本的に全く同感だが、ドイツについてそれほど楽観的になれない。作家のギュンター・グラスが統一に反対だといっているが、同感だ。というのは、過去ドイツは統一してから、特異の文化性を失って俗物化したと思う。西ドイツの場合、経済力に関するうぬぼれ、傍若無人は、東ドイツと一緒になったら手がつけられないところが出てくるんじゃないか。いい意味ではバイタリティー、悪い意味では蛮性を持っており、要注意だ。

だから、NATOにつないでおく以外にないというのはその通りで、NATOも性格が変わってきて、ヨーロッパ国家連合みたいなものにつないでおくということになるだろう。

日本もうぬぼれが強くなると始末が悪い。日本が文明社会の一員として行動できるようになるまで、まだ五十年はかかる。その意味で、当分の間日本を日米安保条約でしばっておいて、相互協力の方に重点を置いていく。ソ連に対抗する面は薄めていく。

日本とドイツという、まことに御しがたい旧敵国をうまく教化していくことが、これからの平和維持、世界の安全保障上重要な要諦（ようてい）だと思う。

**武者小路**　国連という国際機関は、本来そういう目的で作られたもので、NATOとか日米安保条約以前に、国連がそういうことをやるべきだという筋論もあるのではないかと思いますが——。

**中嶋**　国連が国家の枠組みを超えて、世界平和のためにその機能を果たすべき国連は実はほとんど意味を持たなかった。

アジアのNIESを見ても、例えば台湾にしても、韓国にしても、国連というロッパの大変革にしても、

だということは言うまでもないのですが、国際関係がますます公的な国際機構の枠を離れたところで動いているような気がする。国際社会が非常に民営化されているというんでしょうか。

国連が世界の地域紛争を効果的に解決しえなかったという問題があって、米ソ関係にしても、今回のヨーロッパの大変革にしても、

## 日本の貢献

### 軍縮の方法模索

#### 独自の外交戦略が必要

進藤　榮一

一九三九年北海道生まれ。京都大法学部卒。鹿児島大、東京外大、名大、京大経済研各講師、米オースチン大客員教授などを歴任。著書に「現代アメリカ外交序説」（創文社）、「現代紛争の構造」（岩波書店）、「非極の世界像」（筑摩書房）など。

**武者小路**　アジアの場合、日本をアメリカが押さえ込むといっても、日本とアメリカは、第三世界のローインテンシティー・コンフリクトに巻き込まれそうな状況の中では、同じような立場にある先進国です。日本がアメリカと二人三脚でアジアの警官の役割を果たさざるを得なくなってしまうのか、それがどういう方向に行くのか。その意味で、日本の周りの状況がどうなってくるかという中で、日米安保の問題も考えられると思いますが——。

**中嶋**　これから世界を攪乱（かくらん）していくのは、統一しようとするドイツと、ますます経済の上で力がついてきている日本の二つではないか。ある意味で、日本に対する不信感が非常にあると思う。

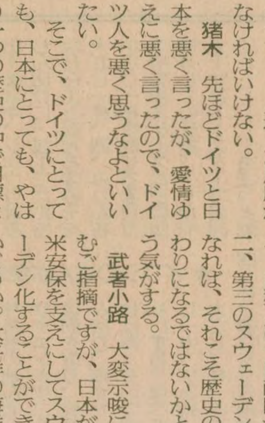
そうなると、いわば安全保障上の日本としての考え方をもっと世界に説得していくために、まだまだ努力が必要だという気がする。

もう一つは、中国の天安門事件以来の日本政府の対応など見ていると、西側諸国とちょっと変わったことをしようとする。フランスなどこの点では厳しい。人権とかデモクラシーの根幹に触れる問題では、たとえ外交を犠牲にしても譲れないという原則が西側にはあるが、日本にはそうした原則がない。

**佐瀬**　日本の対中姿勢は特殊だということですが、近くのトラブルは遠くのトラブルに比べて処理が難しいのです。それを言うならば、フランスが例えばリトアニアに対して人権の立場から、どれだけ支援できるのかなど含めて、全体を通じて見ないといけない。

それから、アジアにおけるローインテンシティー・コンフリクトを仮に想定する場合、日本は何かやらないといけない。武者小路さんは、アメリカと一緒になってアジアの警官役をやるのかと疑問符付きで言われたが、日本は救急車みたいなことはやらなければいけないと思う。

例えば、ペルシャ湾に機雷があったとき、自衛隊の掃海能力の高さに目をつけて、掃海艇を派遣してくれないかという話があった。出したら痛くない腹を探られるというので出さなかった。日本は何もしないが、何かするとなると、また軍隊として出ていくのではないかと疑われるという悪循環が続いている。反発もあろうが、丸腰で出ていく救雷とか、自衛隊の高さに目をつけて、掃海艇を派遣してくれないかという話があった。出したら痛くない腹を探られるというので出さなかった。日本は何もしないが、何かするとなると、また軍隊として出ていくのではないかと疑われるという悪循環が続いている。反発もあろうが、丸腰で出ていく救



中嶋　嶺雄

一九三六年長野県生まれ。東京外大卒、東京大大学院修了。社会学博士。東京外大教授のかたわらオーストラリア国立大、パリ政治学院各客員教授など歴任。著書に「現代中国論」（青木書店）、「中国」（中公新書）、「中国の悲劇」（講談社）など。

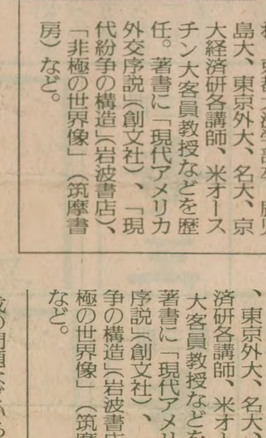
**猪木**　先ほどドイツと日本を悪く言ったが、愛情ゆえに悪く言ったので、ドイツ人を悪く思うなよといいたい。

そこで、ドイツにとっても、日本にとっても、やはり一つの歴史の中で目標というか、モデルがあってしかるべきだと思う。その点、いいといけない。武者小路さんは、アメリカと一緒になってアジアの警官役をやるのかと疑問符付きで言われたが、日本は救急車みたいなことはやらなければいけないと思う。

例えば、ペルシャ湾に機雷があったとき、自衛隊の掃海能力の高さに目をつけて、掃海艇を派遣してくれないかという話があった。出したら痛くない腹を探られるというので出さなかった。日本は何もしないが、何かするとなると、また軍隊として出ていくのではないかと疑われるという悪循環が続いている。反発もあろうが、丸腰で出ていく救

**猪木**　先ほどドイツと日本を悪く言ったが、愛情ゆえに悪く言ったので、ドイツ人を悪く思うなよといいたい。

そこで、ドイツにとっても、日本にとっても、やはり一つの歴史の中で目標というか、モデルがあってしかるべきだと思う。その点、



進藤　榮一

一九三九年北海道生まれ。京都大法学部卒。鹿児島大、東京外大、名大、京大経済研各講師、米オースチン大客員教授などを歴任。著書に「現代アメリカ外交序説」（創文社）、「現代紛争の構造」（岩波書店）、「非極の世界像」（筑摩書房）など。

**武者小路**　大変示唆に富むご指摘ですが、日本が日米安保を支えにしてスウェーデン化することができるかどうか。太平洋の海洋核の関係とか、核積載を知らせないということと信頼醸成の問題などいろいろあると思いますが——。

**進藤**　やはり日本は軍縮すべきでしょう。敵、味方がなくなってきているわけだから、軍事的な対立としての意味を外交の基軸に置く必要はなくなってきていると思う。

ヨーロッパはそれを先取りしている。今回のヨーロッパの激変の中で統一ドイツがとろうとしている政策は、やはり短距離核の全廃ですし、東西両独からのソ連軍、米軍の半減です。

しかし、アジアに関して言うと、日本は外交像、自前の国家像がないのではないかという感じがしてしようがない。日本の側から積極的に行動していかないことには、アメリカ人の日本に対する脅威感、世界の日本に対する不快感は募ってくると思う。ソ連も基本的に、ヨーロッパばかりでなく、アジアに対しても軍縮の秋波を送り続けている。

こういった状況下で、日本は具体的な形で軍縮を進めていくべきで、どうして四兆円、国家予算の六％も軍事費を使わなければならないのか、非常に疑問に思う。ソ連の兵力削減の動きに対し、日本側は対応していないのではないか。

**猪木**　対応しています。陸上自衛隊の定員十八万に対して、定員は十五万だ。今度また減らされました。

**進藤**　しかし、国家予算は増やし続けています。

**猪木**　つまり月給が高いからです。

**佐瀬**　内容を見ないで、総額で多いといっても、日本の自衛隊の月給は、世界の兵隊さんの中でトップクラスにあるわけです。

**進藤**　そうなら、どうしてスウェーデン化ができるのでしょうか。やはり軍縮すべきだと思います。

**佐瀬**　核兵器は持っていない。ABC（原子・生物・化学）兵器も持っていない。模範的な軽武装国ですよ。

**進藤**　F15を百五十機買うじゃありませんか。決定したときの論理は、SS20がシベリアに配備されたことに対処するためというものです。しかし、今はSS20はゼロなんです。だからもう当然軍事バランスから言えば、当時に比べて日本の方が上になっているのであって、バランスをむしろ戻すべきだと思う。

**佐瀬**　軍縮というものにはやはり文法がある。一つは、機が熟すということ。もう一つは、政治的雰囲気が改善している場合、必ずしも急がないでいいと言えるかもしれない。

現在の米ソ関係がよくなっていく中で、やはり機が熟さなければいけないし、核兵器は使われないまま役割を終える可能性が出てきた。そういう意味で、海洋核削減の問題は望ましいが、それは保有国が決めることです。

**中嶋**　これほど世界が大きく変わっているのに、日本の安全保障の問題についての考え方は全く変わっていない。昨年の防衛白書を見ても、いぜんとしてソ連脅威論を書いている。ある意味ではナンセンスであって、国際関係の大きな変動に対応する日本自身の安全保障のあり方を根本的に考え直すべき時期にきていると思う。

**進藤**　昨年、米国防総省から出された「ソ連の軍事力」の中では脅威というタイトルが消えている。

それから、いわゆるINF全廃交渉が軌道に乗る過程で、ヨーロッパのINFをめぐる同盟国間の動きは、むしろ核を持たない国が背後で核軍縮外交を展開した。必ずしも核を持たない国が核軍縮に対して発言しても実効性がないとは思わない。もう少し日本は独自の外交を展開していいのではないか。

**佐瀬**　たしかに西ヨーロッパで大変な反核運動が起こりました。それは一定の意味を持っています。しかし、それに腰くだけになっていたら、恐らく八七年のINF全廃協定は実現しなかったのではないか。新しい中距離核の西欧配備に踏み切った、そのことが結局はソ連を真剣な交渉のテーブルに戻したというのが、核軍縮の文法であったと思います。

**武者小路**　この議論は、まさに今、ポスト冷戦期の日本の国際安全保障に対する貢献の問題の中核に触れるものだと思います。ヨーロッパにおけるドイツ、アジア・太平洋における日本の役割について、安全保障上の新しい問題が起こっていることを、我々日本人として真剣に受けとめなければいけないということが、一番大きなきょうの成果であったと思います。ありがとうございました。

東京会議
'90年プロジェクト
【開幕座談会】「世界新秩序への胎動——ソ連・東欧変革の波紋」（4月16日付本紙掲載）
【専門家シンポジウム・シリーズ】（春～夏）
①「ポスト冷戦時代の国際安全保障」
②「激動する欧州経済——解体する東欧・統合する西欧」
③「社会主義の理念と現実」
【国際円卓会議】（秋）「社会主義体制の行方と世界」
Ⅰ、東西関係の変容とその国際的影響
Ⅱ、社会主義経済——その実験と帰結
Ⅲ、文明史の中の社会主義
Ⅳ、イデオロギーを超えて——世界再編のシナリオ

東京会議
'90年プロジェクト
【開幕座談会】「世界新秩序への胎動——ソ連・東欧変革の波紋」（4月16日付本紙掲載）
【専門家シンポジウム・シリーズ】（春～夏）
①「ポスト冷戦時代の国際安全保障」
②「激動する欧州経済——解体する東欧・統合する西欧」
③「社会主義の理念と現実」
【国際円卓会議】（秋）「社会主義体制の行方と世界」
Ⅰ、東西関係の変容とその国際的影響
Ⅱ、社会主義経済——その実験と帰結
Ⅲ、文明史の中の社会主義
Ⅳ、イデオロギーを超えて——世界再編のシナリオ